

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：53401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23331

研究課題名（和文）日本語学習者のためのノダ形式会話教材の開発に関する研究

研究課題名（英文）Preliminary investigation on the development of noda-form conversational materials for Japanese students

研究代表者

市村 葉子（ICHIMURA, Yoko）

福井工業高等専門学校・一般科目（人文系）・准教授

研究者番号：00789373

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語学習者にとって習得しにくいノダ形式を体系的に記述し、会話教材を作成するための基礎的研究を行った。本研究で実施した内容は主に3つである。日本語母語話者が使用するノダ形式を体系的に記述した。使用頻度の高いノダ形式を抽出し、それらの用法（例「んだよね」は「確認」「同意求め」「情報提示」など）をまとめたうえで、各用法が会話でどのようなイントネーションを伴うかを母語話者調査により明らかにした。学習者コーパスを用いて、学習者の各日本語レベルにおけるノダ形式の習得状況を調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、話し言葉で使用されるノダの複合形式（ノダ形式）の語用論的機能の解明と、日本語学習者のための会話教材の作成のための基礎的研究である。本研究の新規性として、ノダに関する先行研究の知見を踏まえ、会話で頻用されるノダ形式を分析した点、実際の会話コーパスを基にノダ形式の語用論的機能を分析、考察した点が挙げられる。当該形式は学習者の言語に翻訳することが困難である一方、日本語の会話で頻用される。本研究が使用頻度の高いノダ形式の語用論的機能を記述したことにより、今後日本語学習教材を作成するうえで知見を提供できたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study is conducted to systematically describe noda-forms that are difficult for Japanese language learners to learn, which eventually may lay necessary research foundation for future development of conversational teaching materials. Three main tasks were undertaken. First is a systematic description of noda-forms used by Japanese native speakers. Then, after identifying the most frequently used noda-forms e.g. 'nda-yone which can be 'a confirmation', 'asking for agreement', 'way to inform', etc., and summarizing their usage, the intonation of each usage in conversation was clarified through a survey of native speakers. Lastly, an investigation of the usage of the noda-form Japanese learners classified based on their Japanese levels was implemented using a public learner corpus.

研究分野：日本語教育

キーワード：ノダ形式 話し言葉 語用論的機能 日本語教育 コーパス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現在日本では外国人労働者が爆発的に増加している。厚生労働省の調査によると、2019年10月時点で全国の外国人労働者数は約166万人であり、2010年10月の2.5倍増加している。さらに、彼らの国籍は多様化しており、全ての言語に日本語を翻訳することは現実的ではない。そのため、彼らの生活を保障する上で日本語学習の支援は喫緊の課題である。特に、日本語話者と意思疎通をするうえで優先すべきは会話力であると考え。本研究は会話力に必要なものの一つとして、文末表現のノダ形式に着目した。ノダ形式と言うのは、「明日は都合が悪いんですよ」のように、「のだ（んだ）」に他の形式が付加された複合形式を指す。

当該形式に着目する理由は主に三つある。一つ目はノダ形式が会話で頻用されるためである。メイナード（2005）は、「のだ」は対話で25.83%、自然会話で25.48%使用されており、使用頻度の高い形式である」と記述している。かつ、ノダ形式は「んです。」といった単独形式ではなく、主に終助詞や接続助詞などとの複合形式で使用される（市村・堀江、2013）。このことから、学習者が自然な日本語を話すためにはノダ形式の習得が不可欠である。二つ目は、ノダ形式は学習者の言語に翻訳できない場合が多いためである。(1)を見てほしい。話し手がある行為についての事情を述べる場合にはノダ形式の使用が不可欠であるが、英語では対応する文法形式がない。

(1) 先に帰ります。今日は娘の誕生日なんです（？誕生日です）。

I'm leaving for today. Because today is my daughter's birthday.

そのため、学習者にノダ形式を指導する際には日本語で状況を説明し、理解させる必要がある。三つめは、これが最も重要な点であるが、ノダ形式が適切に使用できなければ、母語話者との関係構築に影響があるためである。(2)の例を見られたい。

(2) A: これから食事でもどうですか？

B: …今日は娘の誕生日なんです（*誕生日です）。

もしここでノダ形式を使わなければ、食事を断る理由とは解釈されにくい。一方で、ノダの過剰使用は聞き手に不快な印象を与える恐れがある。(3)は申請者が体験した実例であるが、このようなノダの使用は危険である。

(3) (学習者が主催したパーティに申請者が行くと言った後) あ、先生も来るんですか？
学習者には「来てほしくない」という意図はない。しかし状況や音調により「来てほしくないのに来るのか」というニュアンスを帯びるため、危険である。つまり、ノダ形式の適切な使用は、学習者が他者と日本語で円滑な人間関係を構築するために回避できないのである。

しかし、現存の日本語教材で扱っているノダ形式は主に「んです」と「なんですけど」であり、他のノダ形式は会話や例文に使用されているものが多く、指導が十分とは言えない。そこで、会話で頻用されるノダ形式とその発話意図の記述が必要であるとの考えに至った。

2. 研究の目的

本研究はノダ形式と発話意図および使用場面を有機的に結び付けた日本語会話教材の開発のための基礎研究を行った。

3. 研究の方法

(1) コーパス調査

目的：使用頻度の高いノダ形式の抽出

- a. 公開されている複数の日本人会話コーパスを利用し、会話で頻用されるノダ形式とその発話意図について記述した。さらに、近年使用が急増している「そうなんですね」「んですかね」の使用実態を調査し、両形式の増加の原因を考察した。
- b. 公開されている学習者の会話コーパスを利用し、習熟度と使用されるノダ形式の関係を調査した。

(2) 教材分析

目的：教材で使用されるノダ形式の発話意図の分析

ノダが初級後半の学習項目とされていることを踏まえ、初級後半～上級用のテキストにある会話の中で使用されているノダ形式を抽出し、それらの発話意図を記述した。
さらに、ノダ形式の中でも使用が突出して多く、学習項目としても提示されている「んですけど」の提出例と学習者の不自然な使用との関係を分析した。

(3) ノダ形式の使用の有無に関する調査

目的：ターゲットのノダ形式が必要とされる会話文作成のための予備調査

コーパス調査、教材分析の結果を踏まえ、使用頻度の高いノダ形式の会話文を 27 文作成し、ノダ形式の使用の有無を日本語母語話者 70 名に調査した。

例) 料理教室で

先生：材料を入れて、20 分くらい煮ます。

生徒：時間をかけてやわらかく（**するんですね／しますね**）。

先生：そうです。時間をかけてやわらかく煮てください。

(4) 読み上げ実験

目的：ノダ形式の各発話意図で使用されるイントネーションの記述

(3)でノダが有意に多く選択された会話文 22 を抽出し、母語話者 28 名、学習者 17 名に対し読み上げ実験を行い、使用されるイントネーションを分析した。

(5) 聴取実験

(4)で得られた結果を踏まえ、各発話意図に数種類のイントネーションを用いた刺激（会話）文を作成し、60 名の日本語母語話者にイントネーションの自然さを問うた。

4. 研究成果

1) 日本語母語話者の通時的変化の記述

本研究では、「ね」の複合形式である「そうなんですね」「んですかね」の分析をもとに、近年の「ね」の伝達的機能の記述を試みた。具体的には、公開（収録）時の異なる複数の会話コーパスを用いた両複合形式の使用割合を比較した。分析の結果、2000 年代に比べ、2010 年代に公開されたコーパスでは①情報受容場面において「そうなんですね」の使用が「そうなんですか」を上回っていること、②質問場面における「んですかね」の使用が増加傾向に

あることを明らかにした。これらの結果から「ね」の伝達的機能を「聞き手と会話を維持する意図があることを聞き手に明示する」と考察した。そして、近年「ね」の使用が増えているのは、「会話継続」の意思を表明し、相手と円滑な人間関係の構築を目指そうという、語用論的動機付けによるものと結論付けた。

2) 「んですけど」の指導に関する考察と提案

本研究は学習者が交渉場面で使用する「んですけど類（「んですけど」、「んですが」など）」を観察し、不自然さの原因を探ることを目的とした。調査資料は I-JAS で公開されている 2 つのロールプレイ（依頼と断り）であった。

調査の結果、学習者は母語話者と比較して「前置き」の使用が有意に多いこと、学習者が「前置き」として使用しているものに母語話者と異なる使い方があることがわかった。特に理由を述べる場面で多く観察され、「(調理の仕事は) 大変なんですけど、今の仕事したいです」のように、本来「大変なので、今の仕事したいんですけど (、よろしいでしょうか)」とすべきところを、異なる位置で使用されていた。

「んですけど類」は自身で発話を展開する際に便利な表現である一方、「前置き」用法の過剰使用が原因で聞き手を混乱させる場合もある。特に理由を表す場面で「んですけど」を使用すると、それを前置きとして聞き手にいわば強制的に受け入れさせようという態度を表明することになるため、聞き手に不快な印象を与える可能性がある。その場合は、「(事情)ので、～たいんですけど、(許可)」のようなパターンを明示的に指導する必要がある。

3) 日本語口頭能力レベルと使用されるノダ形式との関係の記述

本研究は OPI データを基に、ノダ形式の使用と日本語学習者の口頭能力レベルとの関係を記述した。185 名分のデータ（初級 32 名、中級 72 名、上級 72 名、超級 9 名）を用いてノダ形式の使用実態を調査した結果、以下 3 点が明らかになった。①中級からノダ形式は使用されるが、「んです」「んですけど」に使用が偏っている。②上級－上以降、「んですよ」「んですよ」などの複合形式の使用が増え、母語話者と近似した使用傾向を示す。③「んですから」は上級で使用されるが、超級に近づくにつれ使用が減る。

本研究の結果により、ノダ形式はレベル判定のマーカーとして使用可能であることが示唆された。具体的には、初級レベルの学習者はノダを使用できない、中級レベルは「んです」「んですけど」が主体、上級レベルは「んです」「んですけど」「んですから」、超級レベルは「んです」以外のノダ形式が主体、のような判定が可能となる。本研究はノダ形式に特化し、日本語学習者の口頭能力レベルの大まかな判定が短時間で可能であることを明らかにしたという点で、日本語教育の現場に貢献できると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 市村葉子	4. 巻 54
2. 論文標題 「んですよね」の指導に関する一考察 -日本語母語話者と日本語学習者の使用差に着目して-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福井工業高等専門学校研究紀要 人文・社会科学	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市村葉子	4. 巻 33
2. 論文標題 「ね」の伝達的機能-「そうなんですね」「んですかね」の使用に着目して-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 計量国語学会	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 市村葉子
2. 発表標題 「ね」の伝達的機能 -「そうなんですね」「んですかね」の使用に着目して-
3. 学会等名 計量国語学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市村葉子
2. 発表標題 「んですけど」の指導に関する一考察 -前置き用法を中心に-
3. 学会等名 日本語 / 日本語教育研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市村葉子・宇都木昭
2. 発表標題 母語話者評価に基づくノダ形式の指導に関する提案
3. 学会等名 日本語実用言語学国際会議（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市村葉子
2. 発表標題 日本語学習者のノダ形式の使用と口頭能力レベルとの関係 -OPIデータを用いた調査から-
3. 学会等名 第二言語習得学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------